

金津町伊井白山神社本殿について

国 京 克 巳*

A study of the Honden of Hakusan Shrine in Ii, Kanazu-Cho

Katsumi Kunikyo

This study is based on an actual survey of the historical buildings of the Hakusan Shrine in the district of Ii in the town of Kanazu. The summary is as follows :

- (1)The Hakusan Shrine in Ii was established in 1742 (Kanpo 2), and its existing main building, Honden, is thought to have been built in 1806 (Bunka3).
- (2)Around the 41st year of Meiji, large repairs were made on the parts above the eaves of the Honden.
- (3)Most of the frame timbers of the Honden remain what they used to be except those of its roof.
- (4)The Honden is a popular type of building with rich decorative carvings in the latter part of the Edo era, and the carvings of the Honden are very high in quality.

1. はじめに

金津町伊井区は、戸数 100 戸余りの集落である。この地区には北の方に春日神社、南の方には白山神社が鎮座し、それぞれ 50 戸余りの氏子によって崇敬されている。春日神社は近年新しく改築され、白山神社も新しく改築される場所であったが、本殿に多くの彫刻が用いられた江戸時代末期から明治時代初期にかけての神社建築として注目され、保存の方策が検討された。しかし、本殿をそのまま残すには修理費用が意外に多くかかることが考えられ、どのように保存するか 1 年以上の歳月をかけて議論された。そしてようやくここに神社建設委員の努力により、本殿破損部分の最少の修理を行い、保存されることになった。工事は平成 13 年 7 月より行われ、本年中に完成の予定である。現在、屋根の小屋組が解体され、修理工事がおこなわれている。幸いにも小生は、この建築の修理保存について調査する機会を得ることができ、本稿はこの調査に基づく資料をまとめ、本殿の建築年代とその意義を明らかにするものである。

2. 白山神社について

白山神社は伊井区の南東に位置し、東西に長い敷地で、正面を西に向ける。敷地の正面後方に幅 1 間半、奥行 2 間程度の仮拝殿と 3 間四方の覆屋（いづれも切妻、桧瓦葺き建物）を建て、内部に本殿を置く。仮拝殿左前方に境内社の神明神社をまつ（写真－1）。

『福井県神社誌』¹⁾によれば、祭神は伊弉冊尊で創建等については不明とある。しかし、本工事のための遷宮時に神像 3 体が確認され、さらに工事中に発見された棟札に「白山三社大権現」とあることから、他に大己貴尊、天忍穗耳尊が祀られていることが想像される。伊弉冊尊は白山主峰の御前峰、大己貴尊は大汝峰、天忍穗耳尊は別山をそれぞれ祀っている白山三社である²⁾。ちなみに 3 体の神像は仏像

* 建設工学科 建築学専攻

年号	西暦	内容	資料名	備考
寛保2年	1742	白山大権現勧請	棟札	大工中嶋鐵口衛門
文化3年	1806	奉遷宮白山三社大権現	棟札	
文化12年	1815	下陣の狛犬	笏谷石狛犬銘	
文政13年	1830		祈祷札	
天保8年	1837	灯籠	灯籠銘	
天保12年	1841	神明神社祠建立	祠壁銘	
文久3年	1863	奉上棟	弊枿	棟梁國道藤藏 木茂新兵衛 五郎右衛門 中川重兵衛 大工喜右衛門 棟右衛門 勢五右衛門 治郎右衛門 續太人 作右衛門 与治郎 其太郎 大工勢吉 太助 下新庄 藤松
明治9年	1876	村社	越前国坂井郡神明細帳	
明治41年	1908	社殿改築許可	越前国坂井郡神明細帳	
大正3年	1914	移転	御神酒入底銘	土地改良工事により移転
大正4年	1915	神明神社廃社	越前国坂井郡神明細帳	
昭和3年	1928	大典記念狛犬台座	大典記念狛犬台座銘	
昭和23年	1948	福井地震により向拝屋根倒壊 榎屋倒壊		

表-1 伊井白山神社年表

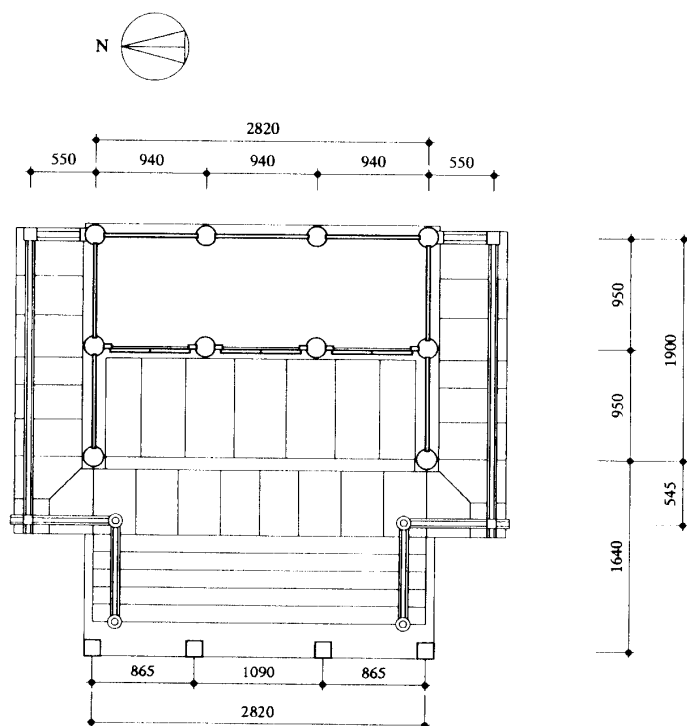


図-1 白山神社本殿平面図



写真-1 伊井白山神社外観

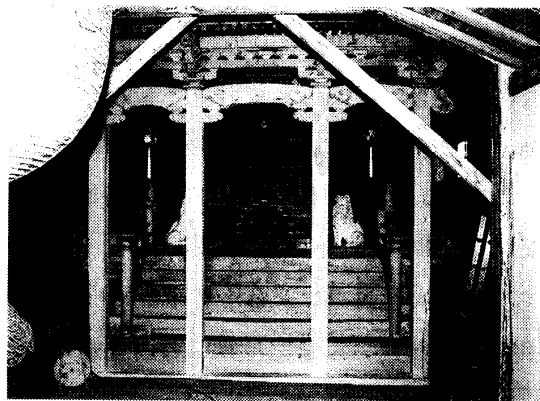


写真-2 白山神社本殿

で、神仏混交のなごりをみせ、それぞれ伊弉册尊が十一面観音菩薩、大己貴尊が阿弥陀如来、天忍穗耳尊が聖観世音菩薩であらわされている³⁾。

神社の創建は、今回の工事にともない発見された棟札から寛保2年(1742)に、白山大権現を勧請して成立したことがわかる⁴⁾。また、同様に発見された棟札から文化3年(1806)に白山三社の遷宮が行われていることが確認でき、本殿の改築あるいは修理が行われたことがわかる⁵⁾。

その後明治9年(1876)に村社となり、同41年に社殿改築の許可を得ていることが「越前国坂井郡神社明細帳」にみえ⁶⁾、この時期に社殿の工事がなされたことがうかがえる。また、大正4年(1915)同村内にあった神明神社が廃社となり、白山神社に移っている⁷⁾。この神明神社は石造建造物の祠で、現在も本殿北西に安置されている。

昭和23年(1948)に福井地震により、本殿・拝殿・覆屋は倒壊した。しかし、本殿は仮復旧され、覆屋と仮拝殿も現状のように建設されて、現在にいたっている⁸⁾。なお、本殿には文化12年の笏谷石製の狛犬一対が、境内には天保8年(1837)とそれより古いと見られる灯籠、そして昭和3年の狛犬が一対ずつ配置されている(表-1)。

3. 1 本殿の建築

本殿は正面3間(2820)側面2間(1900)の前面に3間の向拝を取り付けた三間社入母屋造り平入の建物である(図-1, 写真2~6)。屋根仕上は軒先の一部に残る軒積の部材から柿葺きであることがわかる。基礎は笏谷石の基礎に土台を伏せ、柱を置く。身舎は前後に二分され、後方を神座とし、板扉を構える。外陣は3間を虹梁で受け、吹き放ちとし、板天井をはる。身舎の正側三方に高欄付の縁をめぐらし、脇障子を設ける。縁は切目縁で、身舎柱から三手先の腰組によって支えられる。正面に5級の木階を置き、この部分のみ擬宝珠高欄とする。身舎柱は円柱とし、二手先で丸桁をうけ、二手先の肘木は尾垂木状に下方へつきだす。中備は正面の外陣虹梁上の3ヶ所に彫刻の施された墓股を置き、背面に大きさの合わない透彫の中備を両端の間に置く。側面は墓股を固定するほぞのみで、彫物はみられない。頭貫は正側三方に紗綾形の地紋を施すが、背面にはみられない。このように背面の部材の彫刻を省略した様子は二手先の木鼻や肘木も同じで、彫物が外形のみとなり、渦が省略される。向拝柱は角柱とし、柱上の組物は出三斗で、手挟をうける。軒は二軒繁垂木である。外周部の側壁は浮彫の板壁とし、背面は板壁のみで、彫物はない。向拝柱及び正面身舎柱は側面方向の木鼻を龍・獅子の丸彫とし、身舎背面柱は象鼻とする。全体に彫刻装飾の多い建物である。

3. 2 破損の程度

福井地震による本殿の被害は相当大きかったようで、屋根は身舎小屋組の一部を残してそのほとんどが無くなり、南面の軒に柿葺きの軒積がわずかに残る程度であった(写真-7)。向拝部分は地震により引きちぎられたと考えられ、応急処置として新しい垂木で、間隔も粗く身舎と固定されていた。軒は北西部の隅木が折れ、垂木が幅2m余りにわたってなくなっていた。背面の垂木も2ヶ所で破損し、茅負も折れていた。向拝妻の破風板や懸魚は北側がなくなり、南側は一部破損していた。南から2本目の向拝柱は柱頭部の身舎側が大きく割裂していた。木階も頬杖により固定されてようやく原形を保っていた。高欄は正面の木階周囲の破損が激しく、部材のない所や仕口の離れた部分があった。しかし、この建物の見所となる彫物には、向拝右柱の龍木鼻、本殿右の脇障子柱上部に取り付く龍などの折損を除い

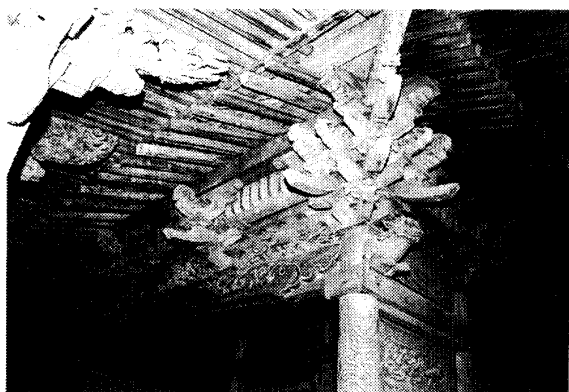


写真-3 本殿正面



写真-4 本殿右側面

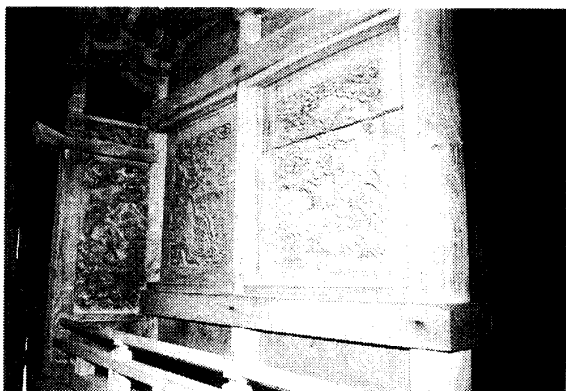


写真-5 本殿左側面



写真-6 本殿背面

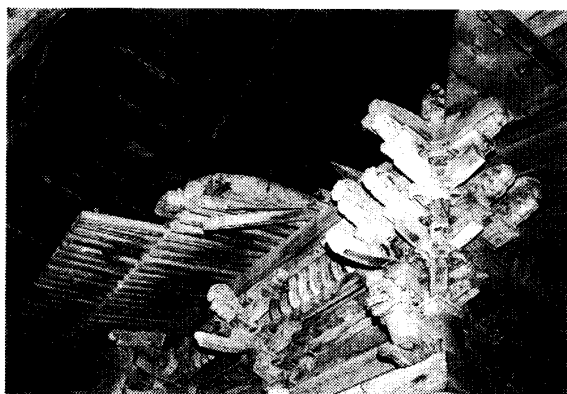


写真-7 本殿屋根の破損状況

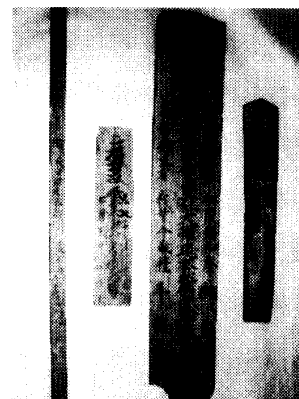


写真-8 発見された棟札等



写真-9 発見された墨書

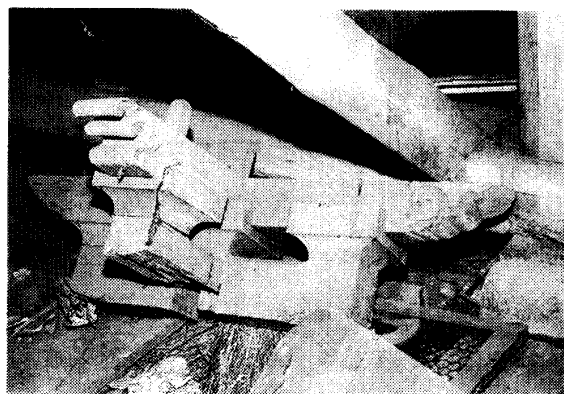


写真-10 旧拝殿の斗組

て大きな被害はない。この被害は覆屋が地震により倒壊し、そのことにより本殿の各部を損傷したものと見ることができる。なお、身舎の中柱2本は笏谷石基礎の中心になく、北東に大きくずれていた。これは地震の被害で本殿が北東に移動したためと考えられるが、土台とその下の笏谷石基礎は正規の位置に納まり、地盤に移動の痕跡がみられない。当初から基礎をずらして据えることは考えられないので、不明な部分である。

この他に経年の風雨によるものとして、身舎左背面柱、切目縁床板、高欄、縁を支える三手先組物と隅木などに大きな風蝕や腐りがみられた。また、軸部や壁板、斗組の緩みもみられた。以上から全体として地震による被害が相当大きいものの、風雨などによる損傷が意外に少ない。本殿の風雨による破損が少ないのは、早い時期から覆屋を設けていたためと思われる。

4. 発見資料

4. 1 棟札等

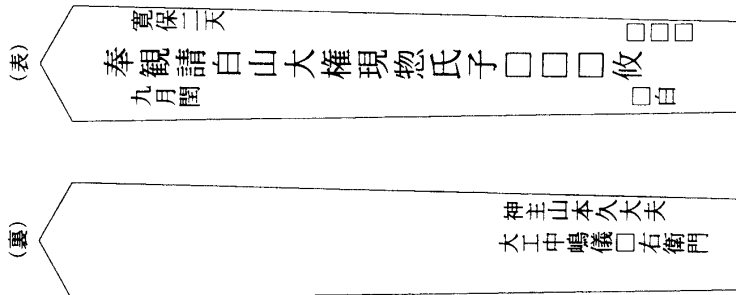
旧小屋組の解体作業中に本殿の神座天井裏から棟札をはじめとする3枚の木札と、上棟式に使用されたとみられる振弊の弊棒が発見された。このうち寛保2年の棟札には、「寛保二天 □□氏 奉観請白山大権現惣氏子□□□□攸 九月閏 □白」とあり、白山神社は寛保2年閏9月に白山大権現を勧請して創建したこととわかる(図-2, 写真-8)。さらに棟札裏面から神主は山本久大夫、大工は中嶋儀□衛門であることがわかる。しかし、いづれにも住所の記入はなく、大工の出身地はわからない。ところが、伊井村の大工をはじめとする職人達の集まりである太子講が管理する文政6年(1823)の石造太子堂の銘には「棟梁 中嶋儀右衛門 世話人 長右衛門 □右衛門 弥三兵衛 市右衛門 石工 猪助」⁹⁾とあり、棟梁中嶋儀右衛門が伊井村に存在したことが確認できる。寛保2年と文政6年には81年の開きがあり、この両者は同一人物とは考えられないが、大工名を襲名していたと見ることは十分可能で、大工の出身地は同村とみてよい。

続いて文化3年の棟札がある。表の主文に「奉遷宮白山三社大権現本地供氏子繁昌祈攸」、裏面に「文化三寅年 越州伊井邑氏神尊 穀雨法八日」とあることから修理あるいは改築が文化3年になされたこと、この時にはすでに祭神が三柱となり、現在と同じであることがわかる。穀雨とは二十四節句の一つで、春の季節の最後で、現在の4月21日頃にあたる。さらに続けて「供養修者 性實院 阿闍梨法印観隆」とあり、儀式を執り行ったのは寛保の時とは異なり、神主ではなく性實院の僧侶であった。性實院とは、後述の文政の祈祷札に「大先達」とあるから白山修験道に関係した寺院と思われる。

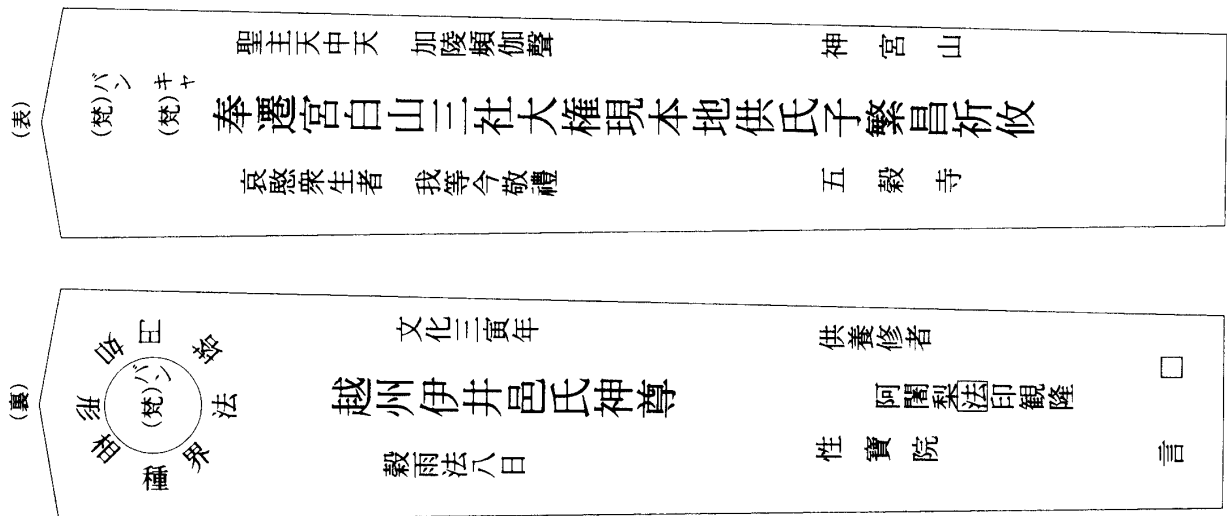
さらに文久3年(1863)八月の弊棒がある。文言に「奉上棟 文久三亥八月十五日」とあることから、この時に建物が新築されたことがわかる。この建物は本殿が新たに作り替えられたか、他の建物が新築されたかについては明らかではない。大工は棟梁圓道藤藏をはじめ11名、木挽3名で、住所がわかるのが、大工の下新庄の藤松、木挽の中川の重兵衛のそれぞれ1名ずつである。下新庄は坂井町、中川は金津町で、伊井村からそれ程遠くない場所である。他の者は住所が記されていないが、棟梁の圓道姓は現在も伊井区内にみられ、喜右衛門をはじめとする名はやはり屋号として現在も使用されていることから、記入のない者は伊井村出身の大工木挽と考えられる。

これらの他に幅8cm、高さ38cm余り、厚さが3mmと非常に薄い文政13年(1830)の祈祷札がある。形は前述の棟札のように尖塔型にはならず、わずかに中央上部がふくらむ程度である。「文政十

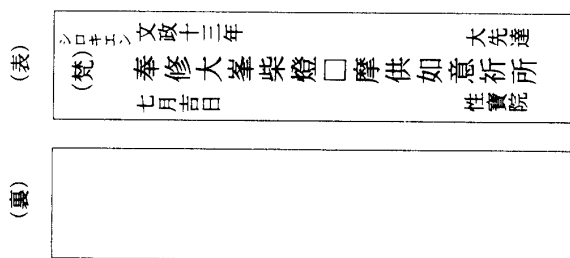
棟札 1 寛保二年棟札 尖塔形 上幅八六 下幅六七 × 総高五一三 × 厚六mm



棟札 2 文化三年棟札 尖塔形 上幅一七一 下幅一四二 × 総高八六五 × 厚九mm



祈禱札 1 幅八一 × 高三八三 × 厚三mm



弊棒 1 幅三三 × 高一八七五 × 厚三〇mm

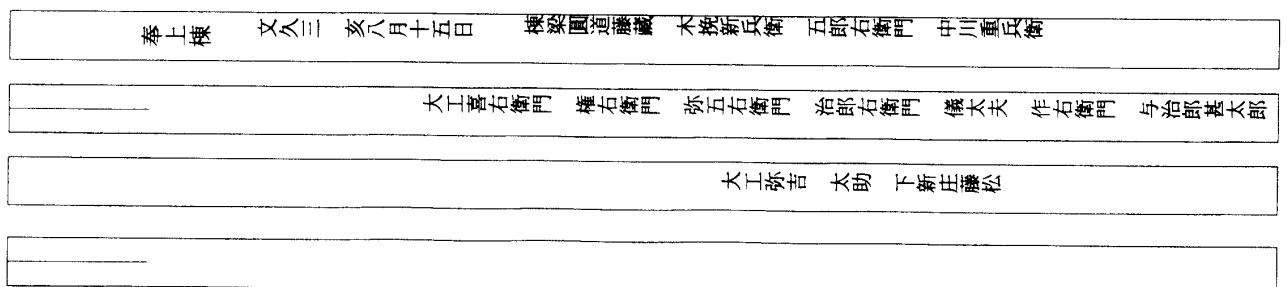


図-2 発見された棟札

金津町伊井白山神社本殿について

部材名	洋釘	和釘	墨書（書きなぐったもの）	墨書（丁寧な字体）	備考
化粧垂木	○	和釘穴跡	○	○	
軒天井板	○	和釘穴跡	○		
茅負	○	和釘・和釘穴跡			
裏甲	○	和釘穴跡			
木負	○	和釘穴跡			
小屋裏内の化粧隅木		和釘		○	
野隅木	洋釘				
野母屋	○・洋釘穴跡				
背面雲形彫物		和釘			
組物間目板				○	
長押		和釘			
正面切目縁長押	洋釘	和釘			部材が新しい
背面壁板				?	
床板（外陣）				○	
床板（内陣）	洋釘				部材が新しい
廻縁（外陣）		和釘			
腰貫				○	
根太（内陣）	洋釘				
根太（外陣）		和釘			
腰組支輪目板	洋釘				
腰組下部天井板		和釘			
床下格子板	洋釘				
縁板	洋釘	和釘			
縁板（正面）			○		部材がやや新しい
柱				○	
擬宝珠高欄柱ほぞ			○	○	
高欄金物			○		
破損皿斗				○	

表－２ 釘と墨書の使い分

三年 大先達 奉修大峯柴燈口摩供如意祈所 七月吉日 性實院」とあり、本殿の修理や改築を示すものではなく、白山修行に関する木札の可能性はある。

4. 2 墨書と部材

4. 2 - 1 番付

平成の修理で、身舎天井裏の丸柱上部とそれに取り付く貫や目板、さらには腰貫に番付の墨書が確認された。例えば、柱上部の「いノ二」、柱腰の「に三」、目板の「いノ二」・「いノ三」、腰貫の「ろ二」・「は二」・「に二」などである。これから番付は向拝柱通り柱が一通りで、身舎柱は後方へ順に二通り、三通り、四通りとなり、左右方向は北から南に二通り、ろ通り、は通り、に通りとなる。また、軒の化粧垂木や天井板、裏甲にも位置を示す墨書が確認された。例えば、向拝の垂木には「前北ヨリ五十五」、「上」、「いノ老北」、背面の飛檐垂木には「下北ヨリ廿三」、また、下陣床板の「南口二」「南口三」などである（写真－９）。ただし、順番が明らかに異なって配置されているものもみられた。これらの墨書には２種類の字体がある。柱番付けを示す「いろは」や「一二三」のていねいな字体と、化粧垂木や天井板に多くみられる「前北ヨリ五十五」「上」などの書きなぐった字体である（表－２）。柱廻りには書きなぐった字体はみられない。また、木階高欄の架木に取り付けられた金物裏面にも「上リダン右」と書きなぐった字がみられた。なお、垂木のように２種類の字体が同じ部材面に記入されているものもあった。以上のことからていねいな字体は創建時の位置を示すもので、書きなぐった字体はその後本殿の一部を解体して修理した時のものであることが想像される。そしてこの修理は書きなぐった字体の番付けの残る部材から、軒裏廻りと正面の高欄や縁板部分であることがわかる。

さらに、平成の修理以前に部材の取り替えが行われたことを示す部材が発見された。それは向拝柱上にある皿斗の皿の破損した２部材である。この内の一つには表裏の見え隠れに丁寧な字体で「いノ一」

と墨書されている。「いノ一」の現在の皿斗には、修理跡がみられない。このことは「いノ一」と墨書された部材は当初材で、何らかの理由により破損し、福井地震以前に取り替えられた可能性を示している。この修理の時期は斗組の取り替えが可能な軒廻りの修理が行われた時と考えられる。

4. 2-2 修理跡

平成の工事で修理された化粧垂木、茅負、裏甲、軒天井板には墨書が数多く残されていたことを述べたが、これらの部材には固定するために和釘と洋釘の2種類の釘が使用されていた(表-2)。洋釘は化粧垂木、茅負、裏甲、軒天井板さらに野垂木を固定する野母屋や床下の根太・格子に用いられていた。この内、化粧垂木、茅負、裏甲には、四角い和釘抜き取り穴が多数確認され、一部に和釘も残っていた。洋釘の使用は一般に明治後期以降であるから¹⁰⁾、明治後期以後に軒先より上の小屋組や屋根が修理されていることが判明する。このことは墨書から想定された内容と一致する。

4. 3 部材の樹種と仕上

本殿に使用される木材の樹種は、柱・虹梁・床板などの化粧材のほとんどが樺である。丸桁や化粧垂木、軒天井板、支輪目板、背面の壁・腰長押、外陣の壁・天井には杉が使用され、木負、茅負、裏甲などは桧とみられる。内陣内も桧である。根太に松、小屋組の梁・野母屋・野隅木には、松や杉が使用される。小屋組に使用されている木材はそのほとんどが虫害をうけていた。根太の松材のうち、内陣床に使用される部材は丸みが多く、仕事も奇麗でなく後から改造されたように見える。このことは、洋釘が使われていることからもうかがえる。内陣内の部材も新しく感じられた。樺材の正面の縁床板や切目縁長押が、両側面の同部材よりも風蝕が少なく、一部の仕口に仕事の不備な部分がみられた。このことからこの部材は、後に修理などにより取り付けられたことがわかり、取り付け時期は縁床板の裏に『北ヨリ四はん』と書きなぐった字が認められ、多少の風蝕がみられるので、明治後期より前となる。

5. 彫刻と絵様

本殿に多数施されている彫刻は、丸彫、籠彫、透彫、浮彫、平彫の多種にわたる。丸彫は本殿頭貫の木鼻や向拝水引虹梁の木鼻などに使用され、龍、獅子、象が彫られる。脇障子の柱に巻き付く昇龍降龍は迫力がある。籠彫は向拝手挟にもちいられ、音楽を奏でる天女、鳳凰、桐、雲が彫られ、彫は見事である。透彫は本殿下陣の正面虹梁上の墓股と背面詰組や脇障子の欄間に使用される。浮彫は、本殿側面壁板と脇障子額内に使用され、それぞれ中国の故事逸話に題材をとり、すぐれたものである。平彫は正側面の頭貫に地紋彫として紗綾形を彫る。このように当建物では、数多くの彫刻技法を一度に見比べることができ、題材も豊かで見飽きない。

一方、虹梁などにみられる若葉と渦の絵様の彫は、向拝虹梁と本殿虹梁で巻方や袖切の形が異なる。しかも、向拝では渦のみである。これは3間社といっても1間の柱間が90cm余りと小さいために、若葉は省略されたと考えられる。なお、彫刻には彩色はみられない。

このように樺で素木の彫刻装飾を多用する白山神社本殿は、福井県内における社寺建築の流れからみると、江戸時代後期の典型的建物であることがいえる¹¹⁾。

6. 本殿の建築年代

伊井白山神社本殿の建築年を示すものとして、前述のように寛保2年と文化3年の棟札、文久3年の弊棒がある。このうち寛保2年の棟札は、彫刻装飾を多用する建築様式からみて現本殿のものとは考え

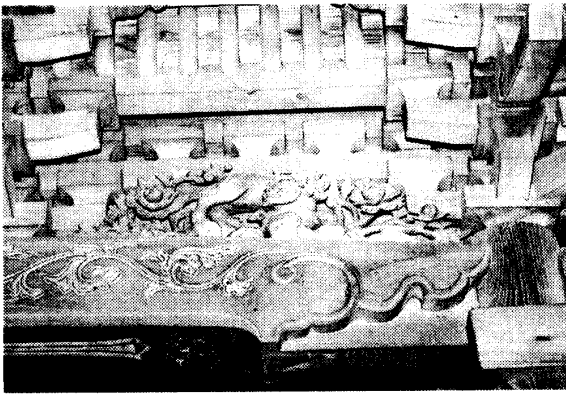


写真-11 白山神社の虹梁

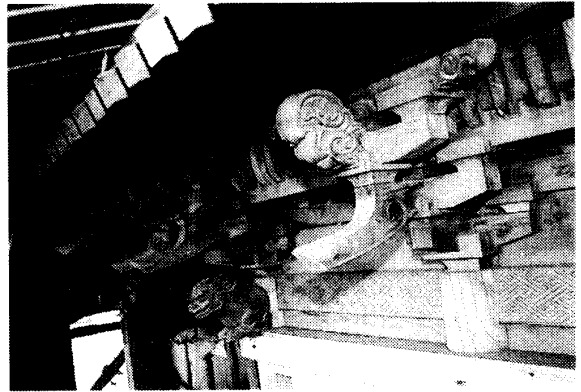


写真-12 白山神社の木鼻

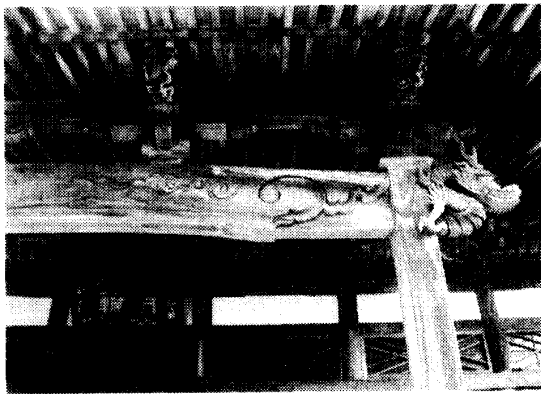


写真-13 願念寺本堂の虹梁

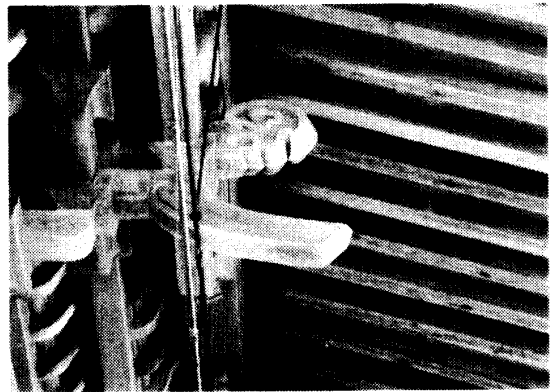


写真-14 願念寺本堂の木鼻

られない。

彫刻の多用される本殿は、細部意匠の検討から文化3年が本殿の建築年と考えられる。その根拠として同じ伊井大工の手になり、享和元年の起工で、文化3年に完成した福井市石新保町にある浄土真宗の願念寺本堂の細部意匠と非常によく似ていることである¹²⁾。寺院本堂と神社本殿の違いはあるが、願念寺本堂の向拝木鼻の龍や手挟の彫物・虹梁の絵様・肘木の木鼻など形態は、白山神社本殿のものと非常によく似ている（写真-11～14）。特に虹梁では、願念寺本堂の絵様の若葉は幅も広く、玉がみられ、袖切の形状もやや複雑になり、白山神社本殿の方が若葉もおとなしく古いように感じられる。また、肘木の木鼻などの形は白山神社本殿の方がやや複雑になり、時代が下るようにも感じられる。このように同じ地域の大工の手になる建物の細部意匠が極めてよく似ていることは、文化3年建設の本殿である可能性を示している。さらに、本殿の板壁や脇障子に施される彫刻も、白山神社本殿では浮彫であり、幕末期に多くみられるようになる透彫を採用していないことも時代の古さを感じさせる¹³⁾。

ちなみに、本殿は部材に残る墨書と洋釘の使用状況から、明治後期以降に軒より上部の屋根を中心とする修理が行われたが、この時期は「越前国坂井郡神社明細帳」にいう明治41年の社殿改築の時期に合致する。この時、正面の廻縁床板も取り外して修理されており、この床板の風蝕はあまりみられず、明治41年にはすでに覆屋内にあったと考えられる。建設当初の床板は本殿建立が文化3年とすれば長くて102年、文久3年とすれば45年風雨にさらされていたことになる。建立当初の床板は1分以上の風蝕が認められる。この風蝕量は45年程度とは考えられず、それ以上と考えられる。

一方、文久3年の棟札は旧拝殿建設時のものと考えられる。「越前国坂井郡神社明細帳」には旧拝殿の建設記録が見られず、昭和23年の福井地震で倒壊していることから、白山神社の社殿が改築された明治41年以前に覆屋と同様に存在していた可能性が高い。ところが、本殿の階段下に斗組や木鼻の一部が残されており、斗組は本殿の斗組よりひと回り大きく、地震で倒壊した旧拝殿（間口約3.5間奥行3間）のものとみられる（写真－10）。この斗組の細部意匠は、明治41年頃というより幕末から明治初期にかけての雰囲気を感じられる。さらに現在の仮拝殿には、旧拝殿のもので明らかに異なった二時期の虹梁が用いられている。このうち一つの虹梁の絵様は、江戸時代に遡ると考えられる。以上から旧拝殿は幕末頃には存在していたことが想像され、文久3年の上棟弊棒は旧拝殿建設時のものと考えることができる¹⁴⁾。

7. まとめ

以上の考察から次のことがいえる。

- 1) 伊井白山神社は寛保2年の創建で、現本殿は文化3年に遡る可能性がある。
- 2) 現本殿は明治41年頃に軒より上部の大掛かりな解体修理がなされている。
- 3) 現本殿は屋根を除いて多くの部材が当初材である。
- 4) 現本殿は江戸時代後期の彫刻装飾を多用する典型的な建築で、その質は高い。

このように本建築は、江戸時代の庶民信仰を代表する神社建築で、その質も高く、また規模も三間社入母屋造りと県内では珍しく、将来にわたって保存されることは非常に意味のあることである。なお、伊井大工については稿を改め、報告する予定である。

謝辞

調査に際して、金津町伊井区ならびに道地氏、円道氏に調査の便宜をお計らい戴きました。ここに記して感謝申し上げます。

註

- 1) 『御大典記念福井県神社誌』福井県神社庁 平成6年9月
- 2) 『白山神社史』白山神社史編纂委員会 平成4年5月。なお、『平泉寺史要 昭和編』平泉寺町昭和史編纂委員会 平成13年 によれば天忍穂耳尊は小白山別山大行事とある。p23
- 3) 前掲2)の『平泉寺史要 昭和編』では本文のようにそれぞれの神を仏に於てるが、当社では別山の聖観世音菩薩にあたる仏像は阿彌陀如来となる。この件に関しては今後の調査が必要である。
- 4) 棟札は図－2 棟札1参照
- 5) 棟札は図－2 棟札2参照
- 6) 「越前国坂井郡神社明細帳 其の三」福井県立図書館
- 7) 前掲6)
- 8) 伊井区民の話による
- 9) 伊井太子堂は伊井区の応蓮寺境内に現在ある。「口時 寛政十二庚申七月建口之 再 文政六癸未 新石混造」
「棟梁 中嶋儀右衛門 世話人 長右衛門 口右衛門 弥三兵衛 市右衛門 石工 猪助」「コノ堂ハ今ヨリ約百七十年前二建テシモノヲ去ル昭和二十三年福井大震災デ倒壊シ講員ノ手デ区民一般ノ協力ヲ得テ再建サレタガ御本体ニハ細少ノ傷デアツタコトハ実ニ不思議ニ思フ所ガ昭和四十二年道路拡張ノタメ移転ヲ余儀ナクサレ当所ニ建立スルモノナリ仍ツテ後日ノ為ニ記ス 昭和四十二年五月 太子講員一同」
- 10) 『建築もののはじめ考』大阪建設業協会編 新建築社 昭和48年 p62
- 11) 吉岡泰英「2社寺建築」『福井県史 資料編14』福井県 平成元年 所収
- 12) 『近世社寺建築緊急調査報告書』福井県教育委員会 昭和56年3月
- 13) 今立町の大滝神社（天保10年）をはじめ、芦原町の八雲神社本殿（慶応元年）は脇障子や板壁の彫刻を透彫とする。
- 14) 二つの虹梁の存在から旧拝殿は幕末以降に改築されたことが想像され、その時期は明治41年頃とも考えられる。

（平成13年12月6日受理）